

飛驒日より

昨年の暮、家の側に山積みした薪もだいぶ背丈が低くなってきました。この地に来たころは薪が少なくなると不安になったものですが、年間の使用量が把握できた今は逆に、薪が少なくなった分だけ春に近づいているのです。

しかし、厳冬真最中の今、春はまだまだ遠いのですが皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。この通信がお手元に届くころには、もうすっかり春のことと思います。冬は決して嫌ではないのですが（四季の内が一番好きです）、春という言葉を口にするだけでどこか心が弾みます。

皆様から多大なご支援をいただいているあぶらむですが、ここで一体どのようなことが起こっているのか、その実態をお知らせすることは仲々困難なことでした。特に、何らかの問題をかかえ学校に行っていない中高生たちとの共同生活に関しては、プライバシーの問題もあり、これまでは何一つお伝えすることはありませんでした。

しかし今回は、S君やK君の生の声に支えられて、あぶらむで起こっていることや、それらを通して日ごろ感じていることをお伝えしたいと思います。

昨年あぶらむの里で生活をした二人の青年に、周囲の大人に対して、また社会や自分自身に対して、日ごろ思っていることを自由に書いて欲しいとたのみました。引き受けてくれるだろうかという思いが強かったのですが、二人とも原稿を寄せてくれました。

S君16才、中学三年生です。学校からは「卒業させるから、そのかわり学校には来ないでほしい」といわれている、不思議な中学生です。

昨年秋、ちょうど稲の脱こくのころでした。ある日突然、これも不思議な大人に連れられて、友人のH君と二人でやってきました。その不思議な大人は（無論、初対面です）うやむやと強引さで二人をあぶらむに押しつけるようにして、翌朝去って行きました。私はそのいいかげんなやり方に怒りを憶えつつも、二人の子供には責任がないと思い、彼らのここでの生活を引受けました。

あぶらむでは、労働は強制ではありません。全くのゼロから出発したあぶらむを支え、創りあげて行くには、私たちには必死で働くしか道はないのです。しかし、ありがたいことに、ここで生活を共にする人々はこのあぶらむ創りに参加するために、重い労働を共にしてくれるのです。

彼ら二人もその労働に参加してくれました。稲の脱こくを終えた後の稲架のかたづけが二人の仕事でした。私はその手順を説明し、彼らにまかせました。脱こく機を運転しながら二人の働きぶりを見ていると、最初は私のいった通りにやっていた二人でしたが、その内に彼ら流のやり方を工夫し、あれこれと三度ほど新しいやり方を試み、最後は私の説明したやり方にもどっていったのです。私はその様子を見ていて、胸が一杯になりました。髪は茶色でおめめ三角といった二人でしたが、常に自分自身でも



お正月準備、男だけのおもちつき

のごとを考え、判断し行動する、主体性と批判的精神に満ちみちた素晴らしい子供たちでした。

夜が暗く長いあぶらむの里では、夕食後の団欒は自然の成り行きです。そんな中で、「昨日のボクと今日のボクはちがう」とポツリと語った彼らの言葉が私から離れません。

「先生はすぐ決めつけてしまう。そのことが腹立たしく、つい粗暴になったりしてしまいます。でも昨日はやりすぎたと反省し、今日はもう少し努力してまじめにやろうと思って学校に行っても、先生はボクたちを見る目を変えようとはせず、決めつけてしまう。今日は少しはまじめにやろうと思っているのに、決めつけられてまうとかえってその分だけよけいに乱暴になってしまうんだ。昨日のボクと今日のボクとはちがうんだ。先生や大人たちはそのことをわかってはくれない」。彼らのその話を聞いていたら、40年ほど前のことが鮮やかに思い出されてきました。

10才ほど年上の姉と、オバの家を訪ねた時のことだった。昔話しのために出されたアルバム、しばらくして後、どういう訳かその写真が落書きされ、破かれていた。子供は私一人、周囲の大人の目が一勢に私を見た。誰も目が犯人はお前だといっていた。自分ではない、でも子供はその場で私一人、この逃れようのない中で私は泣き叫び、必死にあばれた。そのことによってしか私の心は満たされず、周囲の大人は犯人が私であることを確信した。今でも思い出すと悲しくなる。

大人というものは年齢をとると、硬くなるのは身体だけではなく、最も自由（柔軟）である心までも硬くなるのでしょうか。相手の中に日々生まれる変化を追うことに疲れ、決めつけという一度おした烙印でしかものを見ようとしないのでしょいか。それが大人というならば、成長の直中にある若者は造反するのはあたりまえと思います。人間的であり、主体的であろうとする心ある者ほど反抗的になるのではないでしょいか。

全ての生命は大きな連鎖の中に生きています。人間も例外ではなく、その意味では青少年の心の苦痛の叫びは、私たち大人の心の貧困の表われのように思われます。大人としての私たちの人間的貧しさが、次代を背負う若者たちの心を荒廃させているといえ言過ぎでしょうか。彼らの言動の背後に、どのような心の叫びがあるのか、私たちは今少し忍耐と感性と愛情をもって聴いてやれば、彼らの心はもっと安らぎ、人としてまっすぐに成長して行くように思えてなりません。

K君の原稿には、私もおどろきました。それはその内容にではなく、この通信を通して公にしたことにです。眉毛にソリが入った狼のような目をしていた彼が、素晴らしい笑顔を見せてくれただけで私たちには大きな喜びだったのに、「一生一度しかな

い我が人生、二度と同じ事をしないように心に決めました」という彼の心を聴いて、私たちの心は喜びと嬉しさで満たされています。たった一人でもいい、真底から自分の人生をまっすぐに追い求めて行こうとする若者が、もしこのあぶらむから生まれて行くなれば、神様はきっとそれを祝福して下さいと思います。

今回は、K君S君の原稿に励まされた私たちでした。

さて、この飛騨便りのしめくりに、またまたお願いごとで恐縮ですが、ご協力下さいますようお願い申し上げます。

別稿で詳しく説明させていただきますが、私たちの働きにどうしても必要な、研修所（黙想の家）を今春より建設したく計画しています。私はこの館を、「諸魂庵」と命名したいと思っていますが、その理由は、逝去されたお二人のご遺族からのご寄付から出発し、この世での働きを終えられた人々の魂が寄り集まって、次代を背負う若者を育てて行く、そのような働きの館としたいと願っているからです。



冬の遊び、林内でのソリ遊び

幸い、千光寺住職、太下大圓さんの紹介で、丹生川村の岡田氏より、190年経た家をゆずり受けることになりました。この飛騨地でも、昔からの古い民家が少しづつ姿を消しつつあります。あぶらむの宿のような家はこの地の大きな財産と思います。なぜなら、このような家は、すすけたその太い柱や梁で、私たちの心を深く癒してくれるからです。家までもが使い捨てになったような時代、200年近く生きてきた家を、新しい価値観の象徴として、次代に残して行きたく、強く願っています。

あぶらむの会が発足して8年目を迎えました。この10年で活動のための基盤づくりをと考えてきました。その意味では、この「諸魂庵」は、内容においてもかたちにおいても、一つの節目となる、あぶらむにとって象徴的な建物になると思います。

どうぞ、私たちと共に祈り下さり、ご支援いただければ幸いに思います。

昨夜からの雪、大雪となりました。これからブルドーザーで除雪の仕事、私たちもあぶらむの夢実現のため、黙々と前へ押し歩み続けて行きます。

晩冬とはいえ厳寒の日々、皆様のご健康をお祈りいたします。

1994年3月

あぶらむの会代表 大郷公博

あぶらむの里体験談

『一生一度の我人生』

あぶらむの里の体験談 K君（18才）

ぼくが、大郷先生と初めて出合ったのは、昨年（1977年）の2月でした。まだそのころは、地元でも有名な暴走愚連隊に入隊していました。そもそも、ぼくの人生をちがう道に行かせたのも暴走族のせいだと思っています。

ぼくが暴走族に入隊をしているころは、他の暴走族との喧嘩や、他の暴走族の人間をさらって、顔が無くなるぐらいになぐったり色々ありました。そんなある日、ぼくは私立高校へ転入しました。

初めは「ようしがんばるぞ！」と思い元気に登校して行きました。でも、一歩学校を出るとやっぱり暴走族に入隊しているというので皆が一歩さがってしまい、近所の人目も目の色が変わっているのがわかりました。

そして、私立高校の先生にも暴走族に入隊しているのがわかってしまい、きゅうに先生の目の色も変わったのがわかりました。それからというもの、先生はやたらぼくにきびしく、なぜこんなに変わるのだろうかとうぼくは思いました。しだいにぼくもその態度にがまんができず、毎日のように先生と喧嘩をしていました。

ぼくは思いました。なぜ大人は、子供の悪い所があっただけで、それをどのように直して成長させてやらないのか？、どうして一緒になって考えてやらないのか？、どうして、一緒に話し合わないのか？、そう思いました。

でもぼくは学校が好きでした。冬休みの日、ぼくは謹慎をうけてました。その間レポート200枚近く宿題として出されました。ぼくは、一生懸命がんばって全部のレポートをやりました。そして三学期の前半に両親とぼくが相談室に呼ばれ、学年主任と担任がいました。

そこではっきりとぼくは言われました。「学校にこなくていい」と。ぼくは頭の中が真っ白になりました。今までがんばったのに、レポート200枚やったのになぜだ。

そしてぼくは、頭に血がのぼり言いたい事を全部言って帰りました。その後は、もうメチャクチャ、先生とやり合ったり、学校に行かなかったりして、やりたい事をいっぱいやりました。

そして数日後、両親が校長先生の所へ行き話をしてみればそのような事は言っていない、そんな事があるわけがないと言われ、それを聞きぼくは、ますます頭に血がのぼりました。

そんな時に、あぶらむの里に行きました。でもやっぱり自分では、その事が頭の中

にあり、帰ってから先輩達の卒業式に単車で校内中を爆走しました。

その後、学校も千葉県の学校に転入させられ、でもけっきょく同じで、その学校も続きませんでした。

そして六月ごろもう一回あぶらむの里に12日間ぐらい、生活を立て直しに自分が心の中で行きたいと思い行きました。

そして、あぶらむの里で色々仕事をして、その仕事の中で自分の心の中に何かが変わって行くのをかんじました。

そんなある日、あぶらむの里に色々な人々が来ていて、その中で自分の思っている事を聞いてもらいました。皆さんぼくの話をしんげんに聞いてくれて、何かぼくの心の中を全てうちあけてスッキリした気分になりました。そして次の日からなぜか、頭の中が軽くなった気分でした。ぼくは、大人への考えが少し変わり、ぼくも大人になったら自分の経験した事を話してあげたいです。

そして帰る日になって、突然ニュースが入ってきました。ぼくの小学校からの友達で、同じ暴走愚連隊に入隊していた友達が殺害されたと聞きました。新聞、テレビで全国に知らされぼくは何も言えませんでした。

ぼくは、一生一度しかない我人生をあぶらむの里で生まれ変わり、あぶらむの里から旅立ち、そして二度と同じ事をしないように心に決めました。

大人について

~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~

S君 (16才)

ぼくは、大人についてなにを書いているのか分からないけど、大人について書くことは、あまりありません。

でも、大人になると、車に乗れるし、タバコもすえるから、早く大人になりたいです。

けど、おこってばかりいる大人より、いつも笑っている大人になりたいです。

そのためには、これからいろいろな勉強していきたいし、いろいろなためになることを聞いていきたいと思っています。

## S君のお母さんからの手紙

~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~ ● ~~~~~

寒中お見舞い申し上げます。

あぶらむの方々に暖かいお心で受け入れていただき、Sの気持ちも大分ほぐれてまいりました。大人なんか信用できないと日頃口にしておりましたが、何かをつかんだ様です。



二月は記録的大雪、大屋根の雪下ろしは一日仕事

先日依頼されました作文ですが、どう思われるかを考えすぎて、素直に文章ができなくて遅くなってしまいました。お許し下さい。私との会話の中でSが語った大人への気持ちを代筆します。

- 子供の話をしっかり聞かないで、思い込みだけで決めてかかる大人になりたくない。
 - 子供のことを適当にあしらったり、みくびりしたりする大人にはなりたくない。
 - 失敗をとがめられてばかりじゃ、勇気も自信もなくなってしまう。にっこり笑って元気づける人間が好き。
 - 子供にうそをつくなど言う。うそをつくのは大人じゃないか。いやな事でもいやでない顔をする。本当の気持ちをおさえて……。それが大人だという。全く訳が分からん。
 - 転んで痛さが分かるのに、転ばないように先に止める。痛いことが分かって自分で考えることができるのに、なんで止めるの？先生も、親も……。
- 僕が大人になったら子供を自由にしてやるんだ。
- 反省することがたくさんあります。
- 親の心子知らず、と溜息をついたり、いろいろ悩みました。Sは今春からあぶらむで暮らしたいと前向きに希望を持っています。私達親も、Sにとってそれが幸福であると思います。いろいろな事を体験させて自信につなげて欲しいと願います。
- 後日、あぶらむにおじゃましてご相談したいと思いますので、どうかよろしく願います。
- 時節柄、風邪などひかぬようご自愛下さい。
- 乱筆乱文にて失礼いたします。

あぶらむで1年を過ごして

一年間ボランティア 岸井 篤史

冬の日、静かな朝。目が覚めると、キリッとした冷気が体をつつむ。スタッフハウスを出て、雪の積もった坂道をおぼつかない足どりでいくと、薪ストーブのほんのりとした暖気につつまれた宿につく。一日の活力を得たあとの作業。大郷さんの木を見つめる鋭い目に驚き、なにげない会話の中に発見がある。雪がたくさん降れば作業は中断、雪かきに時間が奪われる。夕刻、一日の疲れた体に川のせせらぎで冷やされ

たビールが染みわたり、みんなの笑いにつつまれた夕食が始まる。そしてまた、あぶらむを静けさがつつんでいく。

私はこんななんでもない一日が好きで、幸せな気持ちになります。

私は、(株)日本青年奉仕協会（略称、JYVA・ジバ）の1年間ボランティアとしてあぶらむで活動している岸井篤史です。去春大学を卒業し、教員を志望していましたが、教員になるためには人としての自分を磨くことが大切だと考え、いろいろな経験をつむために1年間ボランティアプログラムに参加希望し、あぶらむに来ることになった。

初日、大郷さんからあぶらむの活動や生活についての説明があったが、その話を聞くにつれ、心の中に暗雲が立ち込めてきた。あぶらむの活動において、自分のできそうなことが何一つないのである。農業、木工、里の環境整備、自分の住むスタッフハウスの建築。不安が募り、自分は今まで何をして生きてきたのだろうかと思いが滅入ってしまった。

現場にでると、それは現実のものとなった。自分で段取りを考え、進めていく大郷さん。その回りを突っ立っているだけの自分。こんな自分がなさけなくて嫌だった。そのうち、「自分は教員になりたいんだ。この作業はその時に役に立つだろうか」などと考えるようになっていた。そして、こんな風に打算的な考えを持っている自分が、また嫌だった。

木工をしていたある日、手押しがんなを前にして大郷さんが、「これで平面をだして基準を作るんだ。もし、その基準がしっかりしていないと、いいものは作れないんだ」といった。そして手押しがんなをかけ、目と耳で平面がでていないかチェックしていた。

私はハッとした。これは教員のみならず、人として生きていく上で重要なことではないか。自分の内に基準を創り、自分の目や耳で判断していく。これこそ、私がいろいろな経験から得たいと思っていたことではないのだろうか。一見、関係ないと思っていたことが自分に密接につながっていると知った日。私はうれしかった。確固たる芯を身につけ、目を鍛えよう。これが、私の活動テーマとなり、作業に打ち込むことができた。

活動終了まで、あと数週間。あぶらむに来る前には、終了後、ドラマチックに変化した自分の姿を想像していたが、そんな感覚は、今はない。もしかしたら何も変わっていないのではないかと考えることもある。それでもいいではないか。今は、あぶらむでの活動テーマをいつまでも追求して生きていこうと考えている。



一年間の働きを終え帰っていったJYVAボランティア、岸井君

あぶらむの会ネパール研修旅行

あぶらむの会では、人間の心が安らぐとはどういうことなのかを学ぶことを目的として、去る1月3日から13日まで飛驒の方々と共にネパールの地を訪ねてきました。この旅に同行した立教大学教員の西平直さんに紀行文を寄せていただきました。

ネパールの旅 雑感

西平 直

いつ頃だったでしょうか。風の便りに、大郷先生が飛驒の人達とネパールに行くという話を聞きました。「行きたい、でも、私が行っていいのだろうか」。少し心配でしたが、そんな不安はどこ吹く風。実に、楽しく愉快な旅でした。

H氏は、若い娘さんを見かけるや、カメラカメラとあわてだし、O氏は、すてきなステューデスに惚れ込んで夢見心地になってしまい、K氏は、初の海外旅行といいながら、食べるわ飲むわの絶好調。

イビキもネゴトもハギシリも、皆さん元気にぎやかに、期待以上の旅を満喫してきたというわけです。

そんな愉快な旅の中で、今回も、いくつか忘れられない言葉に出会いました。旅の場面を思い起こさせるような、臨場感あふれる、生け捕りにされてきた言葉。

ご一緒させて頂いたH氏は、味と匂いにとてもデリケートな方でしたから、お口に召さない食事であったりすると、何とも哀れに萎れておりました。それが、カトマンズのあるレストランに入った時はまさに絶好調。

「これは日本と一緒や、うまいうまい」。その満足そうな満身の笑みが、とても印象的でした。

私は、どんな味も大丈夫。バンコクのとびきり辛いカレー以外は、すべておいしく食べました。でも、その代わり、Hさんほど感激することもなかったのです。

それに比べて、この方は「自分の味」を強く持っている。好き嫌いがはっきりしているから、好みの味に出会ったら、こんなに感動する。

どっちが「得」だろうか。どっちの方が楽しいだろうか。どっちもどっち、ヒト様ざまかな、と思ったのです。

同じことは、もう一度、トレッキングの二日目、ランドルンの寒い山小屋でもありました。皆な、この日のために持参した日本のカップヌードルを、それこそ、うまいうまいと食べたのです。

ヒマラヤまで来てカップヌードルでもなかならうと、乗り気でなかった私でしたが、あに凶らんや、一口食べて、これはうまい。震えがくるほど、おいしい味でした。

「これが日本の味や、うまいうまい。」はしゃいで食べる「おじさんたち」の姿が、何やら「かわいらしく」見えました。

「でも」と思ったのです。もしこのおいしさ故に、日本の味以外はダメだとか、マズイと言ってしまったら、それは残念です。まして、異国の食べ物を「ゲテモノ」などと言ってしまったら、とてもおかしい間違いになると思ったのです。

私たちには私たちの、彼らには彼らの、互いに異なる「おいしさ」がある。そんな、あたり前のことを、いつもどこかで感じていたいと思うのです。

それは「日本の味と一緒にや、うまいまい」を否定することではありません。それは大切。うまくて当然。あのカップヌードルは、誰が文句を言おうとやっぱりうまいのです。

でも、まさにそのラーメンをマズイと感じる人がいるかもしれないことを、どこかで憶えておきたい。そして、私たちにはマズくて食べられない味が、懐かしく、おいしくて仕方がない人がいることも、忘れないようにしたいと思うのです。

そして、お互い笑ってしまいたい。こんなに違うものかと、相手を笑うと同じだけ、自分自身を笑ってしまうセンスを、いつも持っていたいと思うのです。それが、旅を豊かにすることであり、昨今はやりの「コクサイカ」の根っこでもあると思うのです。

もうひとつ。私たちのガイドをしてくれた若いネパールの青年たちも、とても印象的でした。

ランドルンの、電気もない風の吹き込む小屋に泊まった晩、ローソクを囲んで、しばらく話し込みました。ネパールは今どうなのか。若い人達には希望があるのか。伝統の影響はどのくらい強いのか。

彼らの上手な日本語と、おいしい地酒のロキシーに助けられ、ずいぶん話が聞けました。

そのランドルンから、深い谷を挟んで対岸のガンドルクには、電気がついていました。彼らは、その明かりを指さしながら、二つの村の違いを盛んに強調しました。

どちらも経済力の乏しい、小さな山肌の村。それなのに、なぜ一方にだけ電気が入ったのか。

それは、村に入った金を、電気と言う「公共に役立つ」ことに使ったか、使わなかったかの違い。村全体のために予算を使う発想が〈ある〉か〈ない〉かの違いだと言うのです。つまり、ガンドルクでは上に立つ者が、その金を独り占めしなかった。上に立つ者も偉かったが、それを支えた村の人も偉かったというわけです。

ネパールの多くの村では、村のボスが予算を独り占めにする。自分の子弟の奨学金に使い込み、私腹を肥やすことばかり考える。そしてその回りを、おこぼれに預かる



地元飛驒の人たちとのネパール研修旅行。少女が背負っていたたき木をかつぐ洞さん

うと男たちが、手揉みしながら取り囲む。そうやって、村の力関係がはっきりし、格差がよけい開いてしまうと言うのです。

「日本だって同じだぞ」。そう言いたかったのですが、日本のODAに話移って、何も言えなくなりました。

金持ち日本のODA（政府開発援助）が、「貧しい国」で、道路を作り病院を建て。でも、実際それを請け負うのは、日本の企業。ネパール国の名前を借りて、日本の政府が日本の企業に仕事を与え、金太りさせているというわけです。

そして、日本企業と結託するネパール政府の要人たちが、利権をむさぼり、それに村のボスたちがタカリつき、みんな自分勝手に私腹を肥やし、庶民はほったらかしにされ、格差は拡がり、権力構造がはっきりするというわけです。

日本も悪いが、ネパールの大人たちも悪い。みんな自分のことだけ考えている。

なんか、暗い気持ちになりそうでした。

「では結局、ネパールにどうなってほしいのか。ルピーが強くなることか。経済的に良くなることか」。

彼らはこんなふうに答えてくれました。

「大人たちが、自分勝手なことばかり考えるのではなく、互いに協力して、国全体の力をつけてゆくこと。そして、ネパールという国に誇りを持てるようになること」。

<ネパールという国に誇りを持てるようになること>。

この若い元気な若者たちの切り拓くネパールの未来に、私も参加したい。そんなことを感じた旅でした。

星野道夫氏の世界

2月26日、「極北最後の大自然、アラスカを撮って20年、星野道夫氏の世界」と題して、地元国府町町民会館で、講演会とスライド上映会を開催しました。

星野さんは、彼の写真集を初めて見て以来、会いたい会いたいと念じてきた人でした。お会いして、人間はこのようにまで透明になれるものかと、我と我が身を見つめ直しました。

星野さんの近著を是非読んでみて下さい。極北の大自然の息吹きと共に、彼の自然に対する姿勢や人としての透明感などが、きっと伝わってくると思います。

エッセー集「イニユニック（生命）」新潮社 1,300円

写真とエッセー「アラスカ、風のような物語」小学館 4,800円

写真集「アラスカ、極北、生命の地図」朝日新聞社 5,900円

研修棟—黙想の家“諸魂庵”建設にむけて

1992年12月、これまであぶらむの会を、そして私個人を深く支えて下さっていた、木俣茂世神父が、赴任先の中国・河西南昌で急逝された。あまりにも突然のことに、私は言葉を失ってしまった。満州での少年時代、志願兵として最前戦での弾薬運びで死戦をくぐり、シベリアの捕虜収容所では死体の埋葬係、収容所火事の際脱走し、南満にむけて20日間余飲まず食わずで走り続けたという。「大郷君、人間、生きようと思えば、どんな状況の中にあっても生きれるものヨ。希望を捨ててはいけないヨ」と、いつも私を励まし支えつづけて下さった、深い祈りの人だった。

その彼がさよならもいわずに、突然に逝ってしまいました。世話になり、多大の迷惑をかけた中国にお返ししたい、その中国で彼は多くの人々の心に感動を残して、アッという間に走り抜けていってしまったのです。

日本での葬儀の後、ご遺族より「兄が心にかけていたあぶらむへ」と、多額なご寄付をいただきました。いつの日か、木俣神父を記念するものをと、「モーセ基金」として積立てることにしました。

そして昨年の中ごろ、未だ若くて奥さんをなくしたM氏より、「あぶらむの働きのために」と、これも多額の寄付をいただきました。私はその時点で、「モーセ基金」を「諸魂基金」とし、この世での働きを終えて帰天された多くの人々の魂（諸魂）を記念し、前述したように、彼らの魂によって次代を背負う若者の魂を育てるべく、黙想、研修の館「諸魂庵」建設を決心いたしました。

ちょうどそのころ、千光寺住職大下大圓氏の紹介で、丹生川村の岡田さんより、数年前まで母屋としていた大家を譲っていただくことになりました。

大黒柱にうちつけられていた棟札を割ってみると、「亨和正三年棟上」とありました。家に帰って辞典で調べたら「亨和元年は1801年」とありました。190年たった旧家なのです。8間×7間（56坪）の平屋ですが、その風格たるや仲々のもので、特に囲炉裏の煙で黒光した梁の丸太が素晴らしく、「諸魂庵」の名にふさわしく、きっと心安まる黙想の家に仕上がることと思います。

建設費は約2000万円を予定していますが、その内1000万円はこれまでお寄せいただいた寄付金及びあぶらむの自己資金、残り1000万円を新しく「諸魂庵建設募金」とさせていただきます。

いつもいつも皆様にはお願いごとばかりで心苦しい限りなのですが、ご支援のほどよろしく申し上げます。

尚、「諸魂庵」という名にちなみ、これまであぶらむの会をご支援いただいた方で、すでに天に召された方々のお名前を記念板に記し、キリスト教会の暦に従い11月2日、それらの方々を憶え、あぶらむで記念式をもたせていただきたく思っています。

その意味では、皆様方の中で記念される方がいらっしやいましたら、遠慮なくお申込みいただきたく思います。

事務局だより

日頃、“あぶらむの里建設募金”にご協力いただきありがとうございます。

本文でもご報告いたしましたように、新たに“黙想の家建設募金”を開始することになりました。いくつかの会費、募金の種類がありますので、以下に整理しておきます。

1. 正会員 個人会員 会費年1万円
法人会費 会費年5万円
2. 賛助会員 会費年3千円
3. 黙想の家建設募金 一口1万円
4. 一般寄附 金額任意

各会費、募金とも、振替用紙に必ずその種類を明記して下さい。

皆様には、重ね重ねご迷惑をおかけし申し訳ありませんが、あぶらむの会の益々の発展のためにお力添えの程、よろしく願いいたします。

会費および募金の振替口座は次のとおりです。

郵便振替 名古屋0-88065 あぶらむの会

正会員申込み者（3月7日現在・敬称略）

杉山久美子 福島修子 吉本正 酒井英代 浦本淳子 鬼本照男 鬼本麗子 宮尾春世 田中尚代 高盛由香 岸井篤史 後藤康夫 荒川紀子

賛助会員申込み者（3月7日現在・敬称略）

田上久子 光安啓明 内間安仁 新井一彦 小野翠 加藤真理子

募金申込み者（3月7日現在・敬称略）

中村ひろ子 賀来信一 岡登正子 武田宏 住田篤 一丸直也 島田信弥 瀬堀光江
具志堅興永 功野裕子 大城恵子 杉村進 山形 和田八束 山本百 渡辺直明
松戸聖パウロ教会 堀江あつみ ショーテック・ホームサプライ 野崎久子 萩尾信也・出穂 熊谷一綱 東京聖テモテ奉仕会 掛川毅雄 山崎俊樹 田島昌子 杉山千鶴子 安斉勇夫 山下恭弘・由美子 祈りの家教会 唐木田麻起子 梶原恵理子 形部賢 三根則子 井上洋子 磯貝澄美子 菊地栄三 山口千尋 味岡敏江 田中一有 甲原一 湯田啓一 古沢伸雄 京都復活教会 清水聖ヤコブ教会 立教高等学校校友会本部 古屋良子 松本信代 小笠原スワ 倉家正雄 谷昌二 小林賢二 鷺見淑子 宇野徹 福田詩郎 福田直美 セントポール・ライオンズ 桑名エピファニー 石井秀夫 木島出 手塚利雄 横山文彦 工藤真喜子 岩間光雄 伴欣征 神田キリスト教会 本間勇吉 田頭道登